

編集後記

本誌『言語文化』は今号で四十号を迎えることができた。ひとつの節目となる号にふさわしく、今号では二つの充実した特集をお届けすることができた。

ひとつは、昨年度末の三月に開催されたオンライン・シンポジウム「時代を映すアダブテーション」の報告および登壇者による原稿の寄稿である。これは、前号（第三十九号）の特集「メディアと子供——児童文学のトランスカルチュラルな展開」につづく「アダブテーション」をめぐるシンポジウムの記録で、七名の登壇者が発表するたいへん充実したイベントから生まれた特集である。前回にひきつづきシンポジウムと雑誌特集を企画

してくださった英文学科の貞廣真紀先生、ならびに登壇者、そして今号にご寄稿いただいた皆さまに心からお礼を申し上げます。

もうひとつの特集は、今号のためにいちから企画された「写真的リアリズムをめぐって」。この特集が生まれたいきさつについては、企画してくださったフランス文学科の大池惣太郎先生による「緒言」ならびに「後記」にくわしいのでそちらをご覧くださいと思うが、「写真」という、扱われている対象の多様性をそのまま「写し」出すかのような本特集の構成も、寄稿論文、制作ノート、インタビュー、鼎談記録と、たいへんヴァリエティに富む内容となった。企画してくださった大池先生にあらためてお礼申し上げますとともに、この企画にご参加、ご寄稿いただいた皆さまに厚く感謝を申し上げます。

編集後記の通例にならって、本誌を刊行している言語文化研究所の二〇二二年の活動について、ここで簡単に紹介させ

ていただきたい。

まずは今年度開催したイベントについて。前年度にひきつづき本年度も、とくに前半は、新型コロナウイルス感染拡大のため、やはりイベントの開催にかんしでは困難な状況がつづいたが、一方、年度末に向かうにつれ、それまでの「苦戦」を一挙に跳ね返すような充実したイベントが続々と開催されることになった。たとえば二月には、沖縄の固有の言語と伝統民藝文化をいかに受け継ぐかというテーマに捧げられたシンポジウム「受け継ぐもの——しまくとぅばとやちむん」が、三月には、ネーデルラントとオランダの美術における複製の問題を扱うシンポジウム「十五〜十八世紀ネーデルラントとオランダ美術における複製／コピー」が、そしておなじく三月には、西欧古典文学におけるアダブテーションの問題に焦点を当てたシンポジウム「古典文学を考える」の開催が企画され、（この編集後記を執筆している現在の時点で）一部はすでに盛会のうちに幕を下ろした。ちなみ

に、これらのシンポジウムはすべて対面形式で開催される予定である（「古典文学を考える」は対面開催にオンラインをプラスした、いわゆるハイブリッド形式での開催）。なかなか終わりの見えなかったコロナ禍も、ここにきて出口が、あるいは共生の道筋がようやく見えてきたと言ってもいいのではないだろうか。

つづいて読書会について。「古典ギリシア語初歩文法講座」は残念ながら昨年度にひきつづき休講となったが、「ホメーロス研究会」「スワヒリ語講座」「戯曲を読む会」は今年度もオンラインで開講され、しかも今年度からあらたな読書会として「うちなーぐち（沖縄語）講座」が加わった。「古典ギリシア語初歩文法講座」についても、来年度はふたたび対面形式での講義を再開する予定である。本読書会を含め、来年度の読書会開催の有無と開講形式の詳細については、言語文化研究所のホームページを参照していただきたい。さらに「来年度の読書会」といえば、「ホメーロス研究会」が来年

度で、なんと通算一〇〇〇回を迎える予定である！ 本研究会のこれまでの歩みについては、本学名誉教授の工藤進先生が本号に文章を寄せてくださっているの
で、ぜひそちらをご覧ください。

最後に、ごく簡単ながら、来年度の活動についてもひと言。四月以降も数多くの講演会やシンポジウムが企画されている。現段階ですでに大規模なイベントが五つも企画されており、それらについてはまた次号でくわしくご報告することができらう。くわえて『言語文化』の次号の特集もすでに準備に入っている。
——これは、大忙しの一年間になりそうである！

はじめに書いたとおり、今号で四十号というひとつの節目を迎えた『言語文化』であるが、本誌ならびに言語文化研究所の今度の活動にさらに期待していただければと思う。

（齊藤哲也）

*

企画のあらましは諸言に書いたもので、小特集に至った経緯だけ簡単に記しておくと、もともと昨年七月十九日に、夏学期「基礎研究」の授業の枠内で、写真家の横田大輔さん、宇田川直寛さんをお招きしてささやかなワークショップを行なったことがきっかけだった。後日、齊藤哲也所長にワークショップの様子をお話した際、それに絡めた小特集を組んでみないかと誘いだいた次第である。

横田さん、宇田川さんとはその後も回を重ねてお会いし、対談企画を年末に計画したが（「写真的リアリズム」という見出しは当初この対談のためのものだった）、参加者のお身内に不幸があったり、私が新型コロナウイルスに感染したりしたことで、企画はやむなく持ち越しになった。

小特集の発端となる企画が実現しなかったにもかかわらず、思いがけない偶然と諸氏のご協力を得て、当初想定しな

い形で特集を組むことができた。竹内公太さんについては、TCAA受賞を機に彼のアーティスト・ブックを作成していた友人の小屋竜平くんにご紹介いただいた。トヨタヒトシさんを紹介してくださったのは、明治学院大学OGの石川綾子さんである。貴重な出会いの機会を用意してくれたお二人に、この場を借りてお礼を申し上げます。

最後に、急ごしらえの企画に快くご参加、ご寄稿いただいた諸氏にあらかじめ厚く感謝を申し上げるとともに、企画の場を提供してくださった言語文化研究所の皆さま、なかなか集まらない原稿を取りまとめてくださった伊東絢さんに、心より謝意を表したい。

(大池惣太郎)

*

二〇一八年三月から続くシンポジウム「トランスレーション・アダプテーション・インターテクスチュアリティ」の第

四回が、二〇二二年三月二十一日にZoomによるオンラインで開催された。オンラインの特性を活かし、全国から大勢の研究者・一般の方々にご参加いただくことができた。このシンポジウムを基に、今回の『言語文化』の特集「時代を映すアダプテーション」が組まれている。ご登壇・ご寄稿いただいた先生方および参加者の皆様に、心よりお礼申し上げます。

今回は第一部と第二部の間に特別講演を挟んだ三部構成で、第一部は児童文学のアダプテーションに関する内容であった。最初の発表者の田中美保子氏は「選択と断念のはざまから——Philipa Pearce, *Tom's Midnight Garden* の翻案を手がかりに考える」と題して、フィリップ・ピアスの名作『トムは真夜中の庭で』の映画、舞台、グラフィックノヴェルを取り上げ、その翻案の過程で何が選択され何が断念されたか、そのはざまから何が浮かび上がって来るのかを考察している。特にトムが庭の扉を通り抜ける場面と、トムとハティが凍結した川をス

ケートで遡上する場面を、それぞれのアダプテーション作品について詳細に分析している点は大変興味深い。また、二〇二一年末から翌年初頭にかけて英国の湖水地方で上演された劇場版の、ごく簡素化されているにも関わらず臨場感をまったく損なっていない演出についての記述は、この時期に渡英もままならなかった愛読者にとって大変貴重な情報である。続いて安藤聡氏が「床下の小人たち」と「借りぐらしのアリエッティ」——不安な時代を生き抜く「滅び行くものたち」というテーマで、メアリー・ノートンの『床下の小人たち』（およびその続編の一部）とそれを翻案したジブリ映画『借りぐらしのアリエッティ』における設定の変更点と主題の共通性について考察した。原作の舞台であるベッドフォードシャー州の田園を武蔵野の雑木林に置き換えたことは、この作品の翻案として模範解答に近いのではないか、というのが本発表・本論文の主旨の一つである。三番目には福田二郎氏が「大草原

の小さな家」——自伝から小説、テレビドラマへのアダプテーション」というタイトルで、ローラ・インガルス・ワイルダーの自伝『開拓の少女』の草稿が小説『大草原の小さな家』に改編され、さらにそれがテレビドラマになる過程を分析し、自伝から小説への翻案と、小説からテレビドラマへの翻案それぞれの変更点と主題との関係を考察した。自伝の草稿が小説になる段階では、すでに名のある作家だった作者の娘ローズによる添削で、事実よりもフィクションとしての面白さが重視され、「売れる」作品にするための改変が施されたという。小説からドラマへの翻案では、ローラの父を演じたマイケル・ランドンが脚本や演出も手掛け、父親像が理想化されて、成人女性向けソープオペラの要素が強調されている。福田氏の発表・論文ではこのことを具体的なエピソードを例示しつつ丁寧に論証している。

第一部に続いて、株式会社ニューデューアイ代表土居伸彰氏による特別講演「文

学作品はアニメーションに翻案しうるのか？いくつかの具体的な実践例から考える」がおこなわれた。ロシアのアニメーション制作者ユーリ・ノルシュテインに関する研究で博士号を持つ土居氏に、研究者としての視点とアニメーション配信・制作に携わる者としての立場からの視点の両方を示していただいた。講演前半はノルシュテインのアニメーション観紹介が中心となり、アニメーションは映画や他の芸術とは異なる独自の芸術として認識すべきとし、実写映画よりも文学や演劇との類似性を論じたノルシュテインの見解に関する解説が、ノルシュテインの映画を実例として示しつつおこなわれた。講演後半では、長編作品と短編作品の間にある企画・配給といった制作にまつわる諸事情の違いや、古典作品をアダプテーションすることの商業的利点などを、土居氏自身が制作中の『西遊記』のポップなアニメーション版を表示しつつ、分かりやすく紹介していただいた。

シンポジウム第二部では、SF・ジェ

ンダーに関するアダプテーション研究が発表された。奥畑豊氏は発表および論文「核表象のビクチャレスク性を巡って——ネヴィル・シュート『渚にて』とその映画アダプテーション」で、イギリス出身の作家ネヴィル・シュートの小説『渚にて』の二つのアダプテーション作品を比較考察している。一九五七年出版の同小説は核兵器と放射能によるカタストロフィを想像的に描いた作品であるが、一九五九年のスタンリー・クレイマー監督によるハリウッド映画版と二〇〇〇年のラッセル・マルケイ監督によるテレビ映画版の二つのアダプテーションがなされている。奥畑氏は、原作『渚にて』のもつビクチャレスク性に着目しつつ、核の犠牲者たちの表象に関する問題を論じている。結論として、原作自体が内包するビクチャレスク性およびメタフィクシヨンの自己批判性を一方で受け入れ、他方で拒絶するという、原作をめぐる解釈の相違が、二つのアダプテーション作品の方向性の違いを生み出したと述べ

る。浜崎史菜氏は「フェミニスト・アクティヴィズムにおける『動物』表象のアダプテーションとポリテクス」と題する発表をおこなった。浜崎氏によると、「アダプテーション」という語は、通常文学テクストに用いられるが、社会における言説においても汎用され得る。この考えに基づき浜崎氏は一九六〇〜七〇年代のフェミニズム・アクティヴィズム、特に一九六八年のミスアメリカプロテストにおける「動物」をめぐる言説や表象およびその問題点を考察した。浜崎氏曰く、一九六八年のプロテストにおいて、フェミニスト・アクティヴィストたちが女性食肉などで消費される「動物」に喩えられるような存在ではないと抗議したが、「動物」を下等な生き物や他者として人間社会から排除するというアクティヴィストたちの考え方が、男性中心主義的かつ人間中心主義的な価値観に基づいており問題である。中村麻美氏は、カナダの作家マーガレット・アトウッドのデリストピア小説『侍女の物語』（一九八五

年）の数ある翻案作品の中、最も知名度が高く、作者も制作に関与しているＴＶドラマ（二〇一七年／現在）について発表した。論文「ＴＶドラマ『ハンドメイド・テイル／侍女の物語』におけるシスターフッドの幻影」では、小説をドラマ化する際の諸問題、特にセクシュアリティと人種にまつわる問題を検証している。中村氏によると、ドラマ版は＃MeToo運動やアメリカの中絶問題の高まりの中、「フェミニズムのシンボル」として人気を博したが、フェミニズムを考える上で重要な「インターセクショナリティ」の視点を欠いている。中村氏曰く、ドラマ版では小説版にないレズビアン・バイセクシュアル女性への性暴力場面が加えられているが、こうした描写はあまりにも図式的で批判すべきである。また中村氏は、ドラマ版は有色人種の俳優を起用し多様性を示すものの、作中で黒人女性は白人女性に比べ不当な扱いをされることが多いと指摘し、本作品で描かれる女性たちの「連帯」は幻想に過ぎず、

このドラマ版にはホワイト・フェミニスト的傾向があると結論づけている。

J A 日下氏はシンポジウムでの発表はおこなっていないが、本紀要の特集用論文「ケン・リュウ著『真の芸術家たち』と芸術的デリストピア」を寄稿した。同論文は、中国系アメリカ人SF現代作家ケン・リュウの短編小説「真の芸術家たち」に関する二種類のアダプテーションを扱っている。一つは、作中で人間とAIのそれぞれによる過去の作品の翻案もしくは模倣が対照的に描かれていることに関して、両者が対照的に描かれつつも両者の境界が曖昧になっている点を指摘し、同短編がAIの進歩が著しい現代社会における人とAIの関係の可能性と恐怖を映し出していると論じる。もう一つは、小説「真の芸術家たち」自体が短編映画化されていることに着目し、原作と映画との比較をおこなっている。とりわけ、映画版がジェンダー的な改編をおこなっていることを指摘している。

児童文学を扱った論文あるいはSF・

ジェンダーをテーマにした論文集である
本特集では、原作（主に小説）が舞台・
グラフィックノベル・アニメーション・
映画・テレビドラマなど別の媒体へいか
にアダプテーションされているかが論じ
られている。いずれの論考も、異なる時

代に異なる地域で作られたアダプテーシ
ョン作品を対象に独自のアプローチで考
察しているため、共通項を見出し関連づ
けることは困難であるが、一つ確実に言
えることは、いずれのアダプテーション
作品も、現代の様々な地域の観客・視聴

者の要望や価値観を考慮した変更が施さ
れ、それ故多くの人々を魅了している
ということである。本特集でそのことを実
感していただければ幸いである。

（シンポジウム・特集企画者一同）